南北朝時代とは
どういう時代だったのか？
そしてその謎

令和7年 6月21日

南北朝時代を取り上げた経緯

日本の歴史の中で、700年前の「南北朝時代」が、あまり知られていないことに疑問を持った。

「南北朝時代」から200年後の戦国時代は映画やテレビでたびたび取り上げられている。
「南北朝時代」から150年前の源平合戦の時代やその後の鎌倉時代は映画やテレビで取り上げられている。

それにも関わらず、「南北朝時代」は、なぜ取り上げられることがないのだろうか？

自分なりに調査した結果、いろいろと面白いことが分かった。

皇統分裂の要因

後嵯峨天皇（1242年即位）は1246年に4歳の久仁（ひさひと）親王（後の後深草天皇）に譲位して、自らは上皇として院政を敷く。

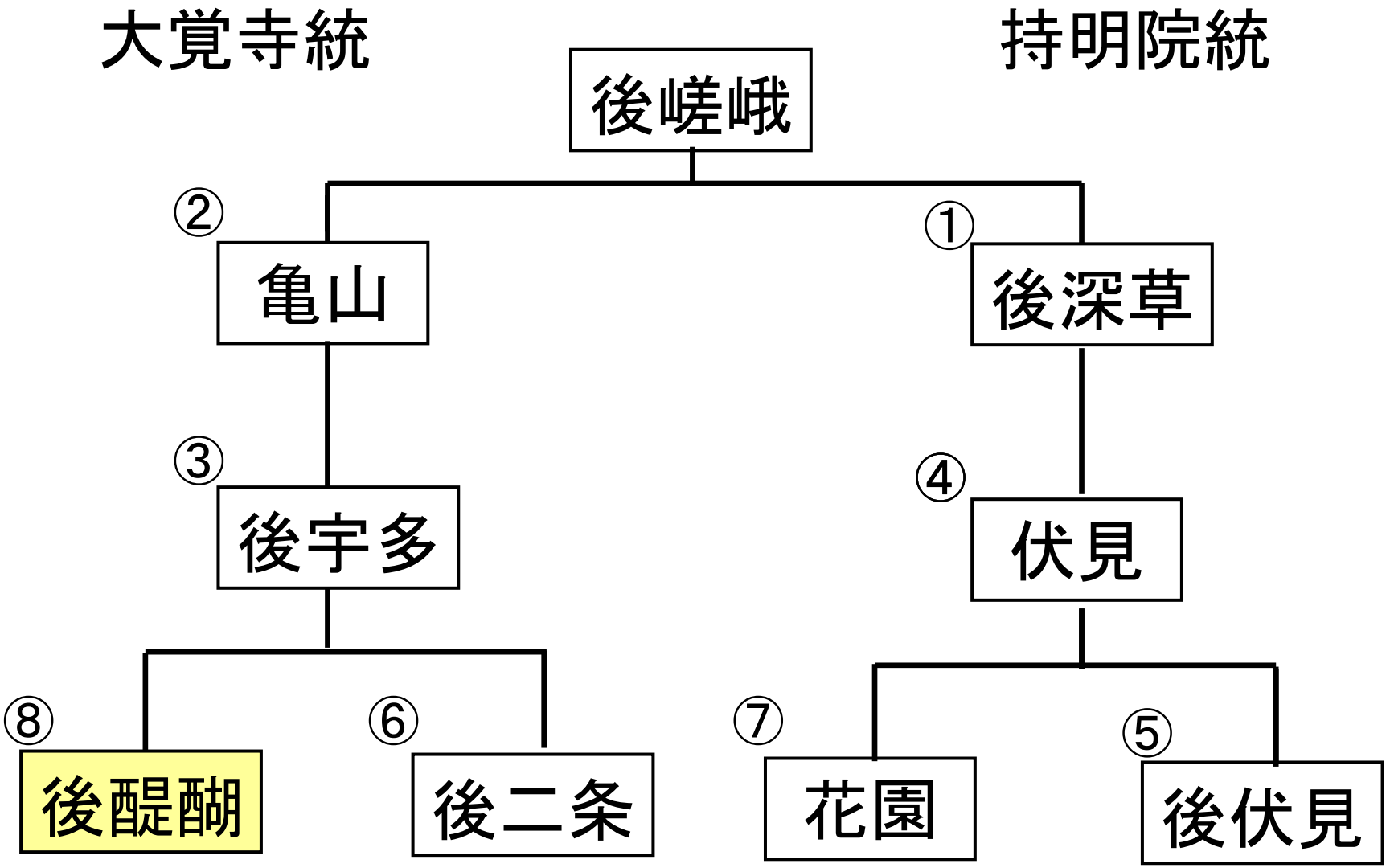
後嵯峨上皇は1259年に後深草天皇の弟で11歳の恒仁（つねひと）親王を即位させ、亀山天皇とする。

1268年、後嵯峨上皇は亀山天皇・皇子の世仁（よひと）親王（後の後宇多天皇）を皇太子とする。

後嵯峨上皇は亀山天皇の子孫に皇統を伝える意図があったと推測されるが、意志を明確にしないまま1272年に崩御。
遺言書にも後継者指名の文言はなく、ただ鎌倉幕府の意向に従うよう記されていた。

後深草上皇と亀山天皇は対立を深め、幕府の執権・北条時宗が後深草上皇の子孫の「持明院統」、亀山天皇の子孫の「大覚寺統」が交互に天皇を輩出する「両統迭立（りょうとうてつりつ）」を提案して、皇統は事実上分裂した。

後醍醐天皇までの皇統の流れ



正中の変

後醍醐天皇の側近・日野資朝（すけとも）、
日野俊基（としもと）が倒幕の密談を重ね、
正中元年（1324年）9月23日の北野神社祭礼日に
挙兵すると決めるも、土岐頼員（ときよりかず）の
密告により発覚。
日野資朝と日野俊基は鎌倉へ送られ厳重な取り調べを受け、資朝は佐渡に流罪、俊基は謹慎となった。
（正中（しょうちゅう）の変）

元弘の変

後醍醐天皇は皇子・護良親王（もりながしんのう）を
天台座主に据え、後醍醐天皇自らも東大寺や興福寺
などに行幸して、倒幕の協力を要請。
元弘元年（1331年）、天皇の側近・吉田定房（さだふさ）
が、この動きを幕府へ密告。
正中の変で無罪となっていた俊基は鎌倉で斬罪、
佐渡に流罪の資朝も斬罪となった。
後醍醐天皇は笠置山へ逃がれ挙兵、それに呼応し
吉野の護良親王と河内国の楠木正成も挙兵したが、
幕府軍に敗北した。（元弘の変）
後醍醐天皇は退位、持明院統の量仁皇太子が即位
（光厳天皇）。
後醍醐天皇は隠岐の島へ配流。

建武の中興までの流れ

元弘3年（1333）年1月19日、楠木正成が四天王寺で六波羅軍を攻撃。
2月、幕府軍が赤坂城を攻略したが、千早城では楠木正成が反撃。
閏2月24日、島の侍に扮した名和長年の手引きで、後醍醐天皇は小舟で伯耆の海岸にたどり着く。
閏2月28日、名和長年は後醍醐天皇を奉じて、幕府軍と戦うため船上山に集結（その数150騎）。
船上山（鳥取県琴浦町）は標高615mの山で、東西及び北方は屏風岩と呼ばれる高さ100m以上の断崖が連なる天然の要塞。
船上山に80日間滞在の後醍醐帝は討幕の綸旨（りんじ）を各地に発す。

建武の中興までの流れ（２）

幕府軍２千騎、対する名和長年は白布五百反の旗に近国武士の紋を描いて大軍に見せかけた。
名和長年は暴風雨を利用し、射手を率いて猛攻撃をしかけ、幕府軍１千騎を谷底に落とし、名和長年は船上山の戦いに勝利を収めた。

後醍醐天皇が船上山を発つ時には、参陣した人馬は船上山の周囲２０～３０里にも及んだという。

建武の中興までの流れ（3）

元弘3年（1333）年3月、足利高氏は、名越高家とともに幕府軍を率いて伯耆へ向う。
4月27日、足利高氏は丹波の篠村八幡宮で反幕で挙兵。
5月7日、足利高氏は京都に突入、六波羅探題を攻略。
六波羅探題の北条仲時らは、光厳天皇を奉じて、近江へ敗走。
5月8日、新田義貞が上野の新田庄で挙兵。
5月9日、足利高氏の嫡男･千寿丸（後の足利義詮）は、新田義貞軍に参陣。
5月9日、六波羅探題の北条仲時ら一族は番場で自刃。
5月15日、新田義貞が武蔵の分倍河原で北条泰家を撃破。

建武の中興までの流れ（４）

元弘3年（1333）５月１８日、足利高氏の舅の執権・北条（赤橋）守時（最後の執権）が大船で新田義貞軍と交戦し、敗死。

５月２２日、新田義貞は、稲村ヶ崎から進撃して、鎌倉を陥落。

北条高時ら北条一族は東勝寺で自刃、１５０年続いた鎌倉幕府は滅亡。

５月２５日、後醍醐天皇は、光厳天皇を廃位し、年号を元弘に戻す。

６月５日、後醍醐天皇は京都に帰還して、摂政・関白を廃止し、天皇親政を宣言。

６月１３日、護良（もりなが）親王が帰京し、征夷大将軍となる。

建武の中興までの流れ（５）

元弘３年（１３３３）８月５日、足利高氏・新田義貞らの論功行賞を行なう。
足利高氏は後醍醐天皇の尊治（たかはる）親王の一字を賜り、足利尊氏と改名。
９月、後醍醐天皇は記録所を再興、雑訴決断所・武者所を設置。
１０月、陸奥守・北畠顕家（父は北畠親房）は義良（のりよし）親王（後の後村上天皇）を奉じて、父の北畠親房らと陸奥に赴任。
１２月、足利直義（尊氏の弟）は成良（なりよし）親王を奉じ鎌倉に赴任。

大塔宮･護良親王（1）

建武元年（1334年）冬、護良親王と足利尊氏との対立は
激しさを増し、護良親王は、父･後醍醐天皇に尊氏の野望
を指摘し追討の勅語を発することを願うも受け入れられず。
建武2年（1334年）5月3日、護良親王は帝位を奪おうとした
との讒言で捕らわれた。
『太平記』では、皇位簒奪を企てたとして護良親王の
盟友･楠木正成を遠ざける為、紀伊飯盛山での北条残党の
反乱と建武の中興に不満をもつ、大和や摂津、紀伊等の
武家の鎮圧を命じた上で、後醍醐天皇の意を受けた
名和長年、結城親光らにより親王が捕わり、征夷大将軍を
解任され、足利方に身柄を預けられて鎌倉へ送られた。

大塔宮･護良親王（2）

建武2年（1335年）、信濃では北条高時の遺児、
北条時行を奉じた諏訪頼重らによる中先代の乱
（なかせんだいのらん）が起き、関東各地で
足利軍が敗れる。

建武2年（1335年）7月、約10ヶ月余り、二階堂ヶ谷の
東光寺に幽閉（土牢に幽閉とも言われる）されていた
護良親王は、北条時行軍が勢力拡大し、諏訪頼重らに
奉じられることを警戒した足利直義の命を受けた
淵辺義博により殺害されたとされる。享年28歳。

建武の中興のその後（１）

公家に比べて武家が冷遇される傾向にあり、
鎌倉幕府打倒の実働部隊でもあった武家の間の
不満は大きくなっていった。
このような状況で足利尊氏は武家のリーダーとして
武士の人気を集めた。
足利尊氏は北条氏の残党の「中先代の乱」平定のため
京から鎌倉に向かい、弟の足利直義（ただよし）と共に
相模川の戦いで残党を一掃、鎌倉を奪回した。
足利尊氏は、そのまま鎌倉に残留し、度重なる上洛命令
を無視して独自に褒賞を与え始め、新政権との対立色を
濃くしていった。
その後、足利尊氏は箱根・竹の下の戦いで新田義貞を
中心とした天皇方を破り、京へと進軍した。

建武の中興のその後（2）

建武3年（1336年）正月、尊氏軍はついに入京するが、
北畠顕家・楠木正成・新田義貞の連合軍に敗れ、
京から退却、さらに摂津・豊島河原（てしまがわら）の
戦いでも新田義貞軍に敗退。
一旦、九州に下った。

その後、足利尊氏は息を吹き返し、足利尊氏軍は
京に上る途中で光厳上皇の院宣を得たことにより、
足利尊氏の下には西国武士がさらに集結して、
その数は約50万人にも上った。

建武の中興のその後（3）

楠木正成に足利尊氏軍追討の勅命が下るが、
兵力（数）・勢いともに足利尊氏軍が圧倒的に有利な
状況のため、楠木正成は後醍醐天皇に一旦、
比叡山に避難し、その間に楠木正成軍と新田義貞軍が
挟み撃ちして、足利尊氏軍を兵糧攻めにする作戦を提案。

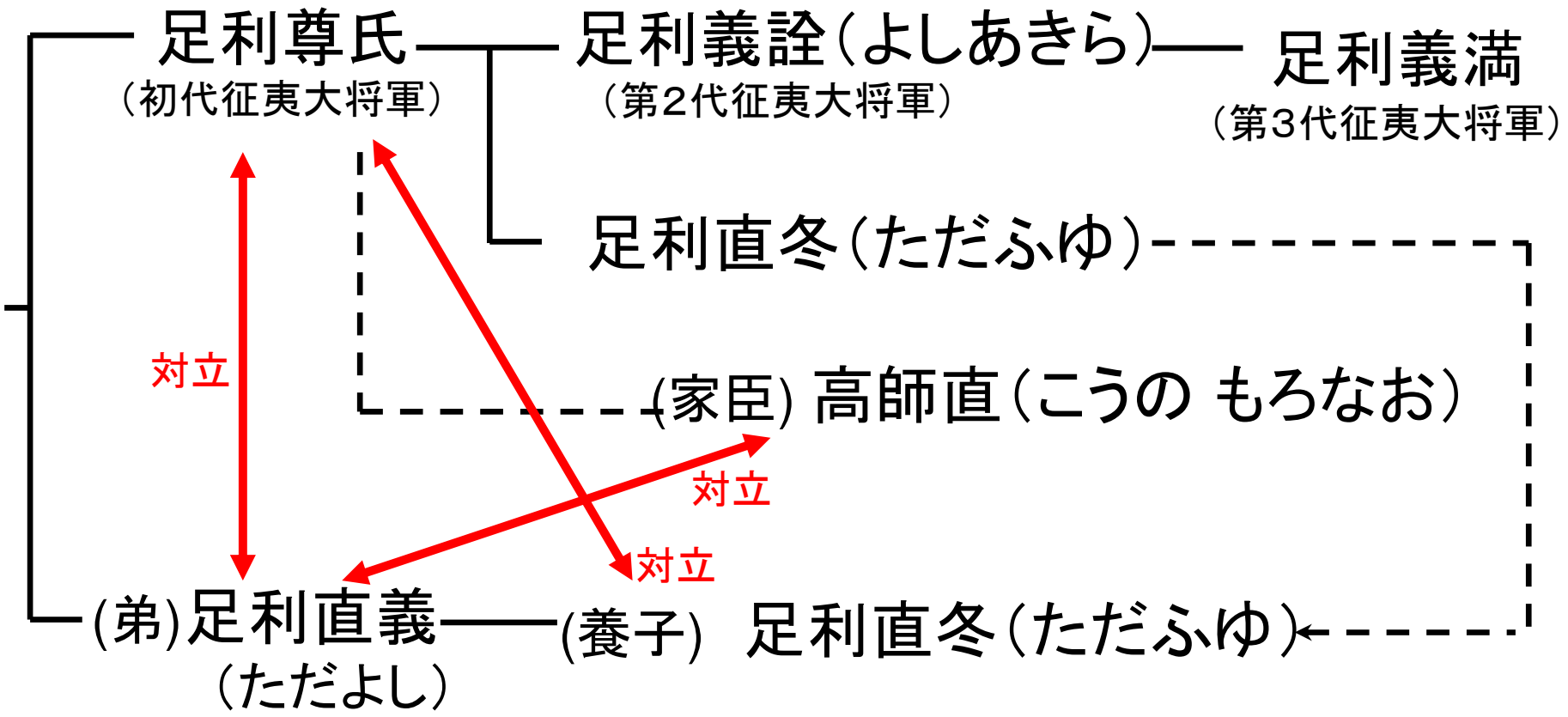
この提案は公家衆などの反発にあい却下されて、
楠木正成は残された道が正面突破のみという絶望的な
状況の中で、決戦へ向かうことになった。
楠木正成は湊川で僅か700騎で足利尊氏軍と壮絶な
戦いの末、自刃した。

建武の中興のその後（4）

後醍醐天皇は退位し、足利尊氏は建武2年（1336年）、
持明院統の光明天皇（光厳上皇の弟）を擁立した。
後醍醐天皇は京を脱出して、足利尊氏に渡した
三種の神器は偽物として、吉野に朝廷を開く。
（南北朝の始まり）

その後、後醍醐天皇は延元4年（1339年）に吉野で崩御。

足利方の関係図


足利尊氏
（初代征夷大将軍）
足利義詮（よしあきら）
（第2代征夷大将軍）
足利義満
（第3代征夷大将軍）
足利直冬（ただふゆ）
対立
(家臣) 高師直（こうの もろなお）
対立
対立
(弟)足利直義
（ただよし）
(養子) 足利直冬（ただふゆ）

室町幕府内の対立（1）

南朝を圧倒した北朝と室町幕府だったが、やがて
高師直と足利直義による対立が激化。
当時、足利政権は政務を足利直義が担い、軍事を
足利尊氏が担う二頭政治で動いていた。
高師直は、足利尊氏を補佐する形で軍事指揮権に
関わっていた。
足利直義と足利尊氏はそれぞれの立場、政治的思想の
食い違いから、少しずつ対立を深めた。
足利直義は、裁判制度の充実や、従来行なわれてきた
制度・秩序を重んじる「保守派」の思想を持っていたが、
足利尊氏は武力を行使することで利権を得る「革新派」
としての思想を持っていた。

室町幕府内の対立（２）

革新派としての思想は足利尊氏ではなく、現場で
指揮を執っていた高師直ら家臣の方が強かった。

革新派と保守派で起きた騒乱が観応の擾乱（じょうらん）
である。
観応の擾乱の始まりは幕府内の内紛だったが、
この争いに乗じて南朝方の武士が次々に挙兵。
戦いは京都、鎌倉、中国地方、九州にまで波及した。

観応の擾乱（じょうらん）（１）

高師直と足利直義の対立がきっかけとなった動乱が観応の擾乱であり、当初は二者の対立が、次第に「尊氏・義詮」対「直義」の対立となり、全国的な争いとなった。

正平4年／貞和5年（１３４９年）６月、足利直義は先手を打ち、高師直を闇討ちしようとするが失敗。
同年8月には高師直が逆襲、危険を感じた足利直義は兄の足利尊氏邸に逃げ込み、高師直・師泰兄弟は足利尊氏邸を包囲した。
このため、足利直義が出家することで和議が成立。

観応の擾乱（じょうらん）（２）

鎌倉にいた尊氏の嫡子・義詮（よしあきら）が呼び戻され
足利直義に代わって政務を担当することになる。
鎌倉には足利義詮の代わりに三男の足利基氏（もとうじ）
が入った。（初代・鎌倉公方）

正平５年／観応元年（１３５０年）、足利直冬が反乱を
起こす。
同年10月、出家した足利直義は密かに京を脱出して、
南朝に帰順。
足利直義の南朝帰順により、足利尊氏・高師直（北朝）
と足利直義（南朝）という新たな南北朝時代に突入する。

観応の擾乱（じょうらん）（３）

正平６年／観応２年（１３５１年）、足利直義は南朝をバックに高師直を朝敵とし、足利直義が京を攻めたため、足利義詮は敗走した。

当時、足利尊氏は足利直冬と戦うため備前に出陣中だったが、足利尊氏は京を目指すも足利直義軍に敗れ、高兄弟を出家させることで足利直義と和睦。
しかし高兄弟は京へ護送中、足利直義により殺害された。

足利尊氏は足利直義と和睦して、足利直義は幕政に返り咲く。
しかし足利尊氏は、足利直義をそのままにしておくことはできず、足利義詮と共に足利直義の討伐を計画する。

観応の擾乱（じょうらん）（４）

このとき、尊氏は信じられない行動に出る。
なんと足利尊氏が南朝へ帰順した。

観応2年（1351年）10月24日、足利尊氏は南朝に帰順し綸旨を得た。
南朝との和睦により、同年11月7日に北朝の崇光天皇は廃され、元号も北朝の観応2年が廃され、南朝の正平6年に統一された。
これを正平一統と呼ぶ。

今度は足利尊氏が南朝の後村上天皇より綸旨を得て、足利直義の討伐を開始した。

観応の擾乱（じょうらん）（５）

足利尊氏は、正平６年／観応２年（１３５１年）１２月、
足利直義討伐のため出陣し、足利直義を降伏させ、
足利直義は鎌倉に落ち延び、翌正平７年／文和元年
（１３５２年）２月２６日急逝した。
足利直義は毒殺されたとの説がある。

正平一統はなったものの、足利方と南朝方での諍いで
和議は破談。
正平7年／観応3年（1352年）３月には観応の元号復活
を宣言し、正平一統はわずか4ヶ月あまりで瓦解した。

足利方が京を奪回し北朝を再び立てたが、光厳上皇、
光明上皇、退位直後の崇光上皇らは南朝（吉野）に
連れて行かれ、北朝の三種の神器も南朝に接収され、
足利尊氏も征夷大将軍を解任されていた。

観応の擾乱（じょうらん）（６）

崇光上皇の弟・彌仁（いやひと）親王が正平7年／観応3年（1352年）8月17日践祚、9月25日に後光厳天皇として即位
北朝と幕府、征夷大将軍職が復興した。

9月27日、北朝は正平一統はなされなかったとし、
従来の観応からの改元を行い、文和元年とした。

この一連の流れは正平一統と相まって、後に南朝に
皇統の正統性を認める原因の1つとなり、幕府と北朝の
権威は大幅に低下した。

正平７年文和元年（1352年）、今度は足利直冬が南朝に
帰順した。

観応の擾乱（じょうらん）（7）

足利直義は幕府内で権力を回復すると、政治的基盤強化のため、足利直冬を九州探題に任命するが、足利直義は南朝、足利尊氏の双方と対立するようになった。

足利尊氏父子が南朝と手を組み、後村上天皇より綸旨を得て、足利直義の討伐を開始。
足利尊氏は正平６年／観応２年（１３５１年）１２月、
足利直義を降伏させ、足利直義は鎌倉に幽閉され、
翌年２月２６日に急逝。

全国に残存する足利直義派が足利直義の死後、
白羽の矢を立てたのが足利直冬であった。
足利直冬と南朝の間で正平７年文和元年（1352年）に講和が成立。

観応の擾乱（じょうらん）（８）

翌文和２年（1353年）、足利直冬と南朝の連合軍は
京都へ攻め込み、足利義詮を京都から駆逐する。

翌文和３年（1354年）、南朝の忠臣、宰相である
北畠親房が亡くなり、足利直冬がその後を継ぎ、
後村上天皇からの綸旨を受け、北畠親房に代わり
指揮をとり、足利尊氏・義詮親子と戦うも敗れた。

観応の擾乱（じょうらん）（９）

足利直冬は、足利直義を父と慕いながらも、足利尊氏を
憎み切れない葛藤があったことが、戦に勝ちきれなかった
要因のひとつのように思える。

足利尊氏も自分をよくしてくれた後醍醐天皇への情を
断ち切れず、兵を向ける際にはノイローゼになったと
言われている。

境遇は違うものの、足利尊氏・直冬父子の
「非情になり切れない人の好さ」というものが、
共通点として垣間見える。

南北朝の対立の継続

正平13年／延文3年（1358年）、足利尊氏が病没。
家督は嫡男・足利義詮（よしあきら）が継ぎ、征夷大将軍に任じられる。
南北両朝が入り混じり、多くの合戦が繰り広げられるうちに、両軍の士気は次第に低下し、南朝・後村上天皇、北朝の将軍・足利義詮は疲弊を理由に和平を考え始めた。

正平22年／貞治6年（1367年）、後村上天皇は南朝の和平代表を楠木正儀（まさのり）（正成の三男）にして、和平交渉するも、同年12月足利義詮が病没、翌正平23年／応安元年（1368年）に後村上天皇崩御、両朝のトップが相次ぎ没したため、和平交渉は自然消滅して、その後約25年に亘り、両朝の争いはなおも続いた。

南北朝合一（1）

正平23年／応安元年（1368年）4月、足利義満が
征夷大将軍に任命され、管領・細川頼之（よりゆき）の
補佐を受けながら、将軍権威を確立してゆく。
細川頼之の働きで楠木正儀を北朝へ引き入れるのに成功。
天授5年／康暦元年（1379年）、細川頼之は土岐頼康
（よりやす）や斯波義将（よしゆき）による康暦（こうりゃく）の
政変で失脚。 これにより楠木正儀は再び南朝に帰順。

南北朝合一（2）

室町幕府の権威はこの時点で南朝を大きく上回っており、幕府に不満を抱いていた寺社などに対し、寺社の修復を積極的に行なうなど寛大な対応を見せたことで、幕府に恭順の意向を示すようになっていた。

幕府は元中9年／明徳3年（1392年）、南朝第4代天皇・後亀山天皇との間に明徳の和平を締結して、
南朝の後亀山天皇が吉野から帰京し、北朝・後小松天皇に三種の神器を譲り退位することにより、事実上の南北朝合一となり、約56年に亘る南北朝分裂は終わった。

南北朝対立が長く続いた原因（自分の所感）

- 後醍醐天皇という歴代天皇の中で稀有な特質を持った天皇の存在

- 足利尊氏は幕府を開くだけの政治力と人望はあったが、源頼朝や徳川家康ほどの冷徹さを持ち合わせなかった。弟・足利直義との争いに、足利直義を追い詰めるため、足利尊氏自身が南朝に帰順、北朝天皇の退位など、更なる混乱をもたらす要因となった。

- 足利尊氏は後醍醐天皇に反旗を翻したイメージが付き纏うことで、幕府の正当性への疑問を多くの人が抱き続け、幕府の権威確立ができず、幕府の基盤が脆弱なまま推移した。
  ⇒このことがその後の応仁の乱、さらに戦国時代の要因に繋がる。

南北朝対立が長く続いた原因（自分の所感）

・鎌倉中期から反幕府、反荘園体制的行動をとった在地領主らを「悪党」と呼んだが、その悪党のひとりである楠木正成という偉大なヒーローを生み出し、その後の武家、庶民に精神的に多大な影響を与えた。（徳川光圀（大日本史）、勤王の志士、昭和期の軍人ら）

・鎌倉時代までは分割相続が主流、その後、単独相続に変わる中、武士層の同族内争いが増えた。幕府から本領安堵された一族への反抗は、幕府への謀反になるが、南朝を後ろ盾にした反抗は謀反ではなく正義となる。

徳川光圀による楠木正成の再評価（1）
（維新回天の原動力）

湊川神社（神戸）の楠木正成の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓」は水戸藩2代藩主・徳川光圀が建てた。
江戸時代末期、吉田松陰や西郷隆盛ら長州、薩摩、土佐などの尊王派志士たちが、京や江戸に上る際に必ず立ち寄った場所である。
水戸光圀自身、勤皇思想に通じる考え方を持っており、兵法家として認知されていた楠木正成だったが、水戸光圀が楠木正成の生き方を紹介して墓碑を建てたことにより、そのイメージが忠臣へと一変した。
勤皇の志士たちが競うように墓碑に参ったのも分かる。
水戸光圀がルーツとされる水戸学はその後の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。

徳川光圀による楠木正成の再評価（2）
（維新回天の原動力）

水戸学は儒学思想を中心に神道や国学を取り入れた
尊王論を核とした学派で、前期水戸学は天皇を尊び、
次いで幕府を敬う尊王敬幕という学問として知られていた
が、後期水戸学になると皇室の尊厳を説いた尊王思想
として広まった
水戸学の礎となったのが、水戸光圀が始めた『大日本史』
の編纂である。
『大日本史』は天皇や皇族、忠臣義士たちの業績について、
全国から史料を集め徹底的に史実を検証し、精緻を極めた。
『大日本史』の編纂には水戸藩の多大な労力が費やされ、
完成したのは250年以上後の明治39（1906）年である。

徳川光圀による楠木正成の再評価（３）
（維新回天の原動力）

神武天皇から後小松天皇まで百代にわたる天皇の治世を全402巻にまとめた大事業であり、楠木正成も忠臣の一人として収録されている。
楠木正成の墓碑建立は元禄5（1692）年8月で、
『大日本史』の編纂に携わった家臣の佐々介三郎宗淳（むねきよ）が現地で指揮した。
『大日本史』の史料集めで全国を旅した宗淳は、
水戸黄門漫遊記や水戸黄門の「助さん」のモデルとされる。

楠木正行（小楠公）（１）

後事を託された嫡男・楠木正行（小楠公）は湊川の合戦後
一族や河内の平安を守るべく河内の国司・守護として
職務に専念し、15歳から22歳まで雌伏の7年を過ごした。

延元元年（1336年）12月21日、後醍醐天皇が僧・文観の
手引きで京都を脱出すると、楠木正行は河内・往生院で
天皇を出迎えた。
後醍醐天皇は吉野金峯山寺を行在所（あんざいしょ）に
定め、南北朝時代が始まる。
その後、延元4年（1339年）、後醍醐天皇崩御。

楠木正行（小楠公）（２）

楠木正行は足利幕府軍と戦い、幕府軍を撃破。
幕府軍は京へ退却の際、幕府軍は大川（淀川）にかかる
渡辺橋に殺到して大混乱となったが、楠木正行は
渡辺橋から落とされた幕府軍５百人を救い上げ、
衣服・医薬などを与えて、京へ送り返した。

正平3年（1348年）1月5日の「四條畷の戦」では、
楠木正行の恩に報い、楠木軍に加わって討死した者も
いたという。

日本赤十字社の創始者・佐野常民（1823～1902）が
国際赤十字社に日本支部設立を申請した際、楠木正行の
渡辺橋における敵方救済の逸話が大いに役立った
といわれている。

楠木正行（小楠公）（３）

「四條畷の戦」では幕府軍は高師直（こうのもろなお）・師泰（もろやす）兄弟を司令官として4万の大軍が集結。
正平3年（1348年）1月、押し寄せる4万の高師直軍に対しわずか1千の兵を率いて決死の戦いに挑んだ。
いったんは高師直の首を取ったと思われたが、影武者のものだったりして、楠木軍は刀折れ、矢尽き、楠木正行は弟・正時と刺し違えて亡くなった。享年23歳。

2代将軍・足利義詮（よしあきら）は楠木正行の人柄に深く感動して、足利義詮は遺言で、自分を楠木正行の傍に葬るように頼んだといわれており、今も二人の墓が並んで立っている。



源頼朝　⇒　足利直義



足利尊氏　⇒　高師直



足利尊氏